



聖木曜日 (ヨハネ 13:1-5)

どこまで互いに足を洗い合うことができるのか

聖木曜日、今年は新型コロナウイルスの影響を考慮して洗足式を中止しました。この最後の晩餐に行われたことは、主イエスの受難を前にして、生きて伝えることのできる最後の遺言です。互いに足を洗い合うこと、ご自分を食べ物として、弟子たちに与え尽くすこと、この両方に、生きて残すべき教えがすべて込められていたのです。

まず、最後の晩餐で残してくださった聖体の秘跡について考えましょう。主は私たちのために、聖体の秘跡と、そのための儀式を残していただきました。主が与えることのできるものの中で、最も尊いものを残していただきました。

いちばん大切なものを残す時、方法はいろいろ考えられたでしょう。その中で「人の命」に繋がる「食べ物」の形をイエスは選ばれました。しかも単純な食べ物ではなく、「イエスご自身」を食べ物として与えようとしたのです。

この説教を考える時に、ふと思い出したのは使徒言行録に記されている「ペトロ、ヤッファで幻を見る」という場面でした。ペトロがヤッファの町に近づいたころ、祈るために屋上に上がっていると我を忘れたようになり、幻を見ます。そこで神と対話する場面は以下の通りです。

「(ペトロは我を忘れたようになり) 天が開き、大きな布のような入れ物が、四隅でつるされて、地上に下りて来るのを見た。その中には、あらゆる獣、地を這うもの、空の鳥が入っていた。そして、『ペトロよ、身を起し、屠って食べなさい』と言う声がした。しかし、ペトロは言った。『主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は何一つ食べたことはありません。』すると、また声が聞こえてきた。『神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない。』こういうことが三度あり、その入れ物は急に天に引き上げられた。」(使 10・10-16)

イエスは最後の晩餐でご自身を食べ物としてお与えになりました。「取って食べなさい」と言われました。ただ、イエスご自身を食べるということは、いつも楽しいことばかり、口に甘いことばかりではないと思うのです。

できれば食べるのを避けたい。逃げようとする弱さを乗り越えて、イエス・キリストを食べて生き続ける。そのような生き方、証の生活を私たちは遺言として与えられたわけです。主が与えてくださった食べ物を、「主よとんでもないことです。これは食べられません」と拒まず、糧としていく。いつかそのような日が来ると考える時に、責任を伴う遺言であったことが分かります。

次に、イエスが弟子たちの足を洗う場面を考えてみましょう。「聖体の秘跡」が「儀式の形で与えられた愛の掟」だとすると、互いに足を洗い合うことは「儀式にとらわれない、その場で求められる愛の掟」と言えるでしょう。イエスが最後の晩さんで残してくださったのは、儀式

を伴う愛と、儀式を伴わない愛。どちらでもイエスの愛を残してくださいだったので。

イエスが弟子たち全員の足を洗ったのであれば、イスカリオテのユダの足も洗ったこととなります。イエスはユダの心の中をご存知です。すでに裏切る考えが植え付けられていました。人間的に見れば、「何でこの人のために身をかがめなければならないのだ」と思っても不思議ではありません。

弟子たちにとっても、ユダが信用できないという思いがあったでしょう。12章6節では「彼は盗人であって、金入れを預かっているが、その中身をごまかしていたからである」となっています。なぜこんな奴のために、先生が身をかがめなければならないのだ」という思いだったでしょう。

人にはお互い相性がありますから、理解できない人には心を開けません。また、人からガッカリさせられたことをいつまでも引きずって、その人のために身をかがめ、足を洗い合うことが受け入れられない場合もあります。イエスはきっと、将来そうしたことが起こることも織り込み済みで、「最後の晩さんの聖体の秘跡」をお定めになったのです。

ここに集まっている私たちは、最後の晩さんの中で与えられたものを、イエスからすべて受け取らなければなりません。「儀式の中での愛は受け取るけれども、儀式を伴わない愛はできない」とか、その反対も、イエスの遺言の片方だけで終わってしまうこととなります。

「これを取って食べなさい」「これを受けて飲みなさい」イエスの招きに、十分に応えられるように、このミサの中で恵みを願ってまいりましょう。

聖金曜日(ヨハネ 18:1-19:42)